

アートにも人生命の発想

コンピューターサイエンスの分野で今年は、人工生命（アーティフィシャル・ライフ、AL）が注目を集めました。まだ学会もない新しい領域だが、七月には米国のマサチューセッツ工科大学で有志による第四回AL会議があり、基礎研究の着実な進展をうかがわせた。表立った形としてはやはりアートの分野でALの発想に基づく多彩な表現活動が目につく。最近の動向を紹介する。

(白石 明彦)

東京・吉原のNTTアーバンラボで開発された「ギヤラリー」で、月に観客数は500人を越す。想生物を作り、一緒に遊び戯れる「インターラクティブ」(双方向)アートト「A-Volve」(エー・ヴォルブ)、「Gaga」が発表された。制作者はクリス・ソムラー(オーストリリア)、ロラン・ミニヨノ(仏)の両氏。

アル」と「アンリアル」との境界を不明確にし、現実と「非現実」をつなげてゆく」としている。コンピューターのいわば生物化という点では、ビジュアリストの手塚豊さんのお口で云々です。士通パー・ソナルシステム研究所が取り組む人工生物プロジェクトにも共通点がある。



水槽の中を不思議な人工生命体が泳ぎ回るインタラクティブアート「A-Volve（エー・ヴォルヴ）」

富士通は一本足の仮想生物シャーロットが住む世界をワークステーションによるシステムで構築したことがある。桃太郎に仕えた犬や猿のようなお供がコンピュータ内部にて、操作方法をアドバイスしてくれたら、機械を使いやくなる——つまりヒューマンインターフェースの向上を目指した研究の一環だった。

現在開発中のソフトはパソコン上で動く。昼夜や四季の変化のある

鳥を合成したような生物「フィンク」がその中に生きている。人が操作しなくとも自らの意志で動き回り、語りかければ反応する。「性格や行動は複雑に設定され、開発者でさえ予期せぬ行動をとる。スタッフの中に相手の目を見ながら話せない内向的な性格の人がいて、フィンクを相手にしていたら、人とも目をそらさずに話せるようになつた。ここには様々な可能性がある」と手塚さん。

従来のティエラは一台のコンピューターのメモリーを舞台とする閉じた生態系だった。レイさんは、この生態系が、インターネットを通じて世界各地のコンピューター内部に広がってゆくネットワーク型ティエラを構想している。有志による人工生命研究会の事務局担当で、ハイパーテキストワーク・ク社会研究所の研究企画部長、会

米に次ぐ研究の拠点

津泉さんはこう語る。

従来のデータベースは一台の「エンビューター」のメモリーを舞台とする閉じた生態系だった。レイさん

津泉さんによると、
「ALはサイエンスではあ
が、これに触発された表現形が

もる

104

一方、大阪市のSAMコラボアムで展示中の「Neuro Baby」(ニューロ・ベビー)は、アーティストの土佐尚子さんによる電音ペッrottだ。モニター画面にCGで描かれた赤ちゃんに話しかけると、声の抑揚や大きさに反応して表情を変え、時には泣き出す。このベビーには、相手をする人間の好みに応じて性格が形成され、知識を学習する機能がある。この機能を心理分析などに生かせないか、と考える心理学者もいる。

来年八月には、東大生産技術研究所の橋本秀紀助教授(知的制御システム)との共同プロジェクト

ゼルスにニューヨーク・ベビーのシステムを設置して、通信網で結び、コミュニケーションニケーション・ツールとしての可能性を研究するという。ALのネットワークといは、アートではないが、ATR間情報通信研究所（京都府福岡市）進化システム研究室のトース・レイさん（トム・レイ）が開発した人工生態系「ティエラ」にも、新しい展開がある。コンピューターのメモリー（記憶装置）の中で、自己を製するプログラム同士が生物のように増殖し、死滅する、ALの界では有名な成果である。

世よ複り開態マ華人え じ、スシ

枠組み越え多彩な表現

一
批

上海で開かれていた陳妍音さん＝左から二人目＝壁やビデオの入った箱の外側にするどい銅製のと

アート・アドバイス

ひのとひで中国で日本現代美術をたつた。

術の発表や関連のシンポジウムが自立ち、その裏には中国美術状況の大きな変化の兆しがあると思われる。十月下旬に開かれた横浜・上海友好都市提携二十周年記念「横浜現代美術展――横浜之風」（上海美術館、上海図書館など）と「94北京国際芸術祭中国・韓国・日本」（北京・首都師範大学美術館）の両展もその流れに沿ったもの

「横浜之風」は横浜市民ギャラリーを中心とする行政主导型の都市間交流展で、私は実行委員長として参加した。絵画・平面作品の十二作家、彫刻マッケントンの十三作家、立体作品の五作家による展示だったが、通り一遍の外交辞令的な域を超えて力の入った会場構成となっていた。ことに直接展示に参加した石田眞利、森脇隆蔵、八柳尚樹

の立体作品は、上海の若い美術家の間で評価が高かった。森村の野外インスタレーション（架設作品）の制作を上海の華山職業美術学校の生徒が手伝う姿や、人民公園で風船のように膨らませた八柳の赤と青の巨大な作品と大勢の子供たちが戯れる光景には、庶民的な親しみが感じられた。

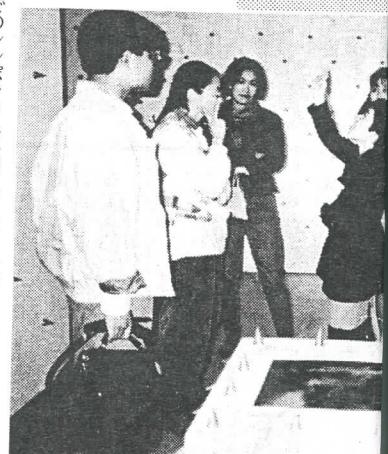
でのシンポジウムには、百人を超す学生ほかが参加し、日本の現代美術に関する質疑応答が活発に行われた。参加者の一人、院で木銅、ビデオ映像などの陳妍音（チエン・ヤンイ）さんは、その時、個展開催中（10月30日で終了。上海油画雕塑院）



どを用いた「原点」、模な新作やそれ以前の、女性の立場に立ち、力強い作品を発表していく。美術底辺にわき起つて、北京の中、韓、による展覧会とシンポジウムが濃く、会期初日以前の開催許可がやっと下り

種の交流
の形跡な
きい。近
作品の出
生的生産
の風」展
京をも訪ね
制と多元的
なパララフ
る中国の姿

中国現代美術の底辺にエネルギー



苦勞も多かつたようだが、この